



昔日話鴉妻表紙卷之五上冊

江 戶

山東京專局

五  
孤  
鶴  
の  
禍  
福

りにし膝の下小サトアモソシヒタリ。汝六年以前あも今月今夜百蟹の巻物と盜逃去たるヲがぞえあづ。我モの夜若殿御放埒の根とたんと。藤波と殺し。そふむ收ありて。一旦館となものにしが同夜の支ナリ。某少もかん疑カラ。汝といひ合せツの巻物を盗しなさんと。共み盜賊の汚名とかくふをぬ。あくちが  
巻物と賣んこら者ある。それとすきて汚名をさうがなぐとあひけぬ。價百兩とつ大金ナリ。力が多。もうあふ娘相はゆ。因て深く悲し。おどり家をアセ物芝居小賣て百兩の金をうの。ツの巻物を買ひし。諸人不面ばさし。丹波の国の大娘と妻小耻どかへを憂すのうこあらぬ。うれまち。漬があせ。一業ふあらむ。唯今そぞもや会せへハ天の与へ我宿恨をあらわせば。時のつゝわゆ。

き。なと。生皮と剥。腰子ふき。ひとも。飽食すととひひく。寶子の上小鼻の尖をとすつて。そのまゝり。雲六ハ一言。答ふ。答ふ。詞あく。只四。まく。こうち。口び。時ふ又平が妻小枝さんや。と。雲六が顔をつむり。口まり。つまて居つた。大ふが死。先年松坂を。妻が懷中の金二十両を奪取。逃去たる盜人のうち此者也。なし。ふる。かえわづとつも。又平をみて。扱へあらかじける。恩人と仇人と。あも同月同日ふ。大ふと出會せし。正是天のあらわゆ。あふ處や。善惡つひ。報ある。まこと。あく。所あらん。の。雲六と。よく。まけ。と。小枝金とうべどひひけり。首縊て死んさせ。三八郎。情を。金子と。合かされ。危と。一命を。たゞと。たゞの始終を。ほくまかうり。ねが。雲六頭をたゞと。居る。だそ。一刀。放後て

腹不食とつむを。と苦しげに息をつむひひくへ。あまゆきうしや  
勿体をや。今やく天の賞罰のたゞちる支をもと。積悪の報の  
親面ふみづとあること成曉了。某の懺悔物語と一回も聞かざれ  
か。ある某在京のうち。五條坂の曲中小通ひて過分の金銀を  
はな。自分たちがむかす。偶惡念ふらと。百蟹の巻物と盜  
取。某館を出奔りて北山を主だ。杉坂ふくろこけふ折しも風雨  
つまうけり。木陰ふ暗間を待居たまふ。そねやう婦人来  
たり。もひ懷中むりげふえり。又惡念ふらと。婦人を地上ふ  
踏倒して二十両の金をうづ。仕合もと遊びて。もの所と逃去あら  
がの巻物を。金五十両小賣けり。一所不住ふ迷めぐら。間ふかの金と  
残りくつひ尽し。づひ零落してつるぎとなり。某の金と奪て

死ふ。ふとあらんと。三八郎づひ金底をつて死を被玉ひつはし。今之  
べ善惡のたゞひ誠ふ壞霄と空だつゆがどとし。豈賞罰の報をうら。  
折某りうごう当國ふりうして草津の駅ふ住家をりて。幸ひ石山寺  
の觀音開帳ありてふきよつけり。の門前ふ出鼓をあくせ舜くの  
謡をうたひて物を乞けふ。前の日ふひうけぞ。幼年の時つとたふ。  
八重垣といふ妹ふあひ住家ふもぢひゆつて。何うれと過去一々  
うを語りけり。妹某がく浪人したるいふれとみゆき。又惡念  
かうと。うつりそひり。我前の年在京の刺偶五條坂ふ通ひ過  
がの金銀とつや。そのかひをほくのん為。若殿もりゆうきな  
絵巻物と質入しける。つまうゆあづれて。と毎な毎。か浪  
の身となりぬ格別の料もあれば。今すもかの巻物をうけとじ

てさへよせば。飯參のやうゆ必定すねども。本金ふ利金をうへて。され  
と百兩たゞこの金すれど。むろくちのひがく。今先非を悔ると  
ひどもかひかへことひそ。そぞ泣しそえせりと。妹これと実やし  
すとば妾が水を賣て金ひそひ。その巻物とうけり。飯參  
を願ひとつあざ。某心不計をしと。欢喜う多くうひと情ちくも。  
妹を当所の伏柴の里ふみとゆき。百兩ふ水を賣て。今日一もろの  
オの代をうけらる。天つものおり立ちと。がる路の傍ふ。一羽の雁首  
をうけて落居立と。飛けひへゆく。アリととも。拔足して拾取て  
ス。あふ。箭の痴鶴のあともす。柳へ立つ。ぢふ。る雁金の行倒りと  
推量し。何ふすれ。福のゆくと。時晚の寝酒の肴とし。ひき。飢なす。  
瘦腹と肥えんのと。公のうち。ふ遊び。や榮耀心ひど。提てせくも

ワズハレと。金財布の紐のあもとを雁の足にあつけ。肩の夫みうりき  
げ。懷手にて饭參しが。何とあけん。かの鴈途中を獲生。アモアラ  
財布とも。虚無を専して飛去り。わひど。翼をたれを悲します。  
ゆきとあひては處まで追まし。シロ。とく。君と始めまり。かのく方ふ出合し。某が旧悪のあづくへ。正是兄の為ふ  
文を賣え。アリ。实。かの妹の水の代をひそがうし。某が非道をふくも。  
天罰をあへ。あふ。疑はず。今ふひそて。アリ。と。ひあひそて。財布  
をそふ。あげ。此百兩の金ハ。先年奪し二十両ふ利と。うへて。又平。あ  
かと。あひ。合力うけし三八郎。どおへは。侵返し玉ひて。情息女根。ど  
かと。あひ。返し玉ひと。さも。と。我水の罪の一分を減じ。ま  
来世とたを。かう便。こも。相わ。と。それと。用内べ。まそ。ふ。や。り。い

しがは度石山寺の門前を。諸人ふとる蛇娘ハ楓どふ凝りし  
用をけてよ清兩人といひて掌と合ひて涙を滴のごとくわざ  
けり。又平家の財布をもとてあむ右房門前より雲六慟邪讖  
罪と実心ふひるがくもしくへ不便ふも存どれ。されが望のぐ  
此金みて。息女をあがむひ坐じといへ。あむ右房門頭を左右ふす  
うごじ。ひやくへ重垣とやんまばうて實の傍者をうれ川竹のなが  
もふきびら長く辛苦とうけ志うんへ。あびがたれりかくす。娘  
楓ハうらや竟悟のうへそ。親の爲ふもぐからうとうするがれせん  
もべり。以金を以して八重垣とこそりし。ほくと居しこつて。  
うけがはさみば雲六苦げ息をつき。うその金みて。法息女の承  
かへりひあらば。ゆうとそ妹が實公のかひものを。殊更その金

おん水の際のあくまふ落ぢ。よし畢竟天より忠臣孝子以賞ト  
もひてうへ玉手疑ひ。若海川。すもおちひり。妹が志ハ水の泡と  
かくめぬし。ひとふりん間うけあひとうし。若ともあよと。某死へても。  
うろく眼をふまたやまととて。床をすましてゆびひ。桂之助娘  
終と同惡ゆもほく。善ふもすれに彼かれ。未期の望すがき  
けり。雲六いうと。げふ打笑。今ハ此無小のぞく。死出の旅路  
りそざる。相公の御前をけらを罪へ。がん免へ。ありれしそ。腹十丈  
字ふりきやぶ。咽呴とみに斬て。うづづ伏てぞ死へたまひ。時ふ  
をも右房門。この鳥どもをぬけてゆく。此鳥鷹不似たまとつゞも  
くねば漢名蒼鵰とよ鳥なり。よく高飛鷹ふ似て葦白之

目相見て孕て吐て子、或生つたり。夏子益<sup>アシタマ</sup>ゲ奇疾方<sup>アシタマ</sup>ト。蓑鶴の肉<sup>アシタマ</sup>ト人血<sup>アシタマ</sup>を和<sup>アシタマ</sup>リテ。痘<sup>アシタマ</sup>を治<sup>アシタマ</sup>ト。所方<sup>アシタマ</sup>カナモト。ある名医<sup>アシタマ</sup>ト。又あり。吃蹇<sup>アシタマ</sup>ト。又も又驗<sup>アシタマ</sup>ある。また。ふかふかひうけをかゝる。奇鳥<sup>アシタマ</sup>或得<sup>アシタマ</sup>ナリ。又一奇事<sup>アシタマ</sup>ナガル。そろそろふりもひふりもざで<sup>アシタマ</sup>。又平<sup>アシタマ</sup>ぞやの鳥の肉<sup>アシタマ</sup>ときたらそろそろ火<sup>アシタマ</sup>あがり。雲<sup>アシタマ</sup>六<sup>アシタマ</sup>鮮<sup>アシタマ</sup>血<sup>アシタマ</sup>とそろびて食<sup>アシタマ</sup>けまふ。頬<sup>アシタマ</sup>ふ咽<sup>アシタマ</sup>とくわ<sup>アシタマ</sup>ふぢり。生<sup>アシタマ</sup>とほたうにたう吃蹇<sup>アシタマ</sup>。忽常<sup>アシタマ</sup>の人のありづごとくふぢりを。これもまことに天の与<sup>アシタマ</sup>へたうめとつよそらきぬも。ひともあはうきうきねば。小枝<sup>アシタマ</sup>於<sup>アシタマ</sup>龜<sup>アシタマ</sup>等<sup>アシタマ</sup>不思議<sup>アシタマ</sup>く。といひて。欢喜<sup>アシタマ</sup>ゆひぬ誠<sup>アシタマ</sup>不<sup>アシタマ</sup>音異<sup>アシタマ</sup>の吏<sup>アシタマ</sup>ナリ。けし。がく<sup>アシタマ</sup>折<sup>アシタマ</sup>しも外<sup>アシタマ</sup>の方<sup>アシタマ</sup>ふ人の足<sup>アシタマ</sup>音ひくしければ。又平<sup>アシタマ</sup>小枝<sup>アシタマ</sup>於<sup>アシタマ</sup>龜<sup>アシタマ</sup>ふ目<sup>アシタマ</sup>矢<sup>アシタマ</sup>とまを。桂之助<sup>アシタマ</sup>と一間<sup>アシタマ</sup>ふぞくし。雲<sup>アシタマ</sup>六<sup>アシタマ</sup>死<sup>アシタマ</sup>を蒲團<sup>アシタマ</sup>ふくろみて床<sup>アシタマ</sup>の下<sup>アシタマ</sup>ふ押<sup>アシタマ</sup>入<sup>アシタマ</sup>舟<sup>アシタマ</sup>不<sup>アシタマ</sup>とねづよひぬもやく。ふせ物<sup>アシタマ</sup>芝居<sup>アシタマ</sup>の主<sup>アシタマ</sup>。楓<sup>アシタマ</sup>と伴<sup>アシタマ</sup>ひくといひけり。裏<sup>アシタマ</sup>ふつも

あも右房門ふむひてびひけんへむん。今日一もは宿とよきをもひし。成  
僕がスうけを告る。楓をわかせやさんため旅宿とたびす參<sup>まつ</sup>。已  
久。楓ハ父ふるをもだり。のうをちりはお姿。母<sup>め</sup>も悪すくもすみ。さそ。さ  
れ涙ふ詞<sup>こと</sup>す。かむ右房門へ祈<sup>まつ</sup>幸<sup>まこと</sup>を遊び。たゞひふ何<sup>なに</sup>とがく<sup>か</sup>  
あひて後<sup>の</sup>芝居主<sup>あばかる</sup>ふむひ。黒あくをえひしきど金<sup>かな</sup>のひけうが尤<sup>とく</sup>金  
百両<sup>ひゃくりょう</sup>と以<sup>て</sup>娘<sup>むすめ</sup>をりどしたゑりどどとゆく。芝居主<sup>あばかる</sup>とくやくふうヶ<sup>が</sup>ひ。  
楓<sup>かづら</sup>すり京大坂へ勿論<sup>いざな</sup>伊勢尾張のあくをまでかでせれ。せりくの金<sup>かな</sup>と  
徳<sup>とく</sup>此地<sup>この</sup>をわが郎<sup>わがわが</sup>坐<sup>す</sup>ふ百両度<sup>ひゃくりょうど</sup>しもり。ふもつとぬとほり<sup>とほり</sup>し  
こひふあぞ。南<sup>なん</sup>天<sup>てん</sup>右房門<sup>うぶ</sup>すとくへ遊び。の金<sup>かな</sup>ととくとゆ<sup>ゆ</sup>て渡<sup>わた</sup>りけりが  
芝居主<sup>あばかる</sup>數<sup>かず</sup>をうためてそりゆきまわ。そんじらひとくがる楓<sup>かづら</sup>が仕合<sup>あわせ</sup>せよと  
金<sup>かな</sup>のうけ取<sup>うけとり</sup>。ひとみのまつと證文<sup>あてしん</sup>ふせんをもじ。印信<sup>いんけい</sup>とよもよて

と木へ楓をつとむ。又ひりとまもべーこひを出ちぬ。時ふ三井の  
晩鐘はげつゝて。勢田のかどすふ夕日のかけぞかくみたり。

(六)名 畫の奇特

初も其時あむ右房門至君桂之助みねうして娘楓ふりまへをさせ。又平夫  
婦阿童等ふも引合せ。今日のうじて物語とひよそかせりねば楓  
かうて因果輪轉の理善惡つりふ報ゆる史を曉して嘆息しけり。  
ひそて又平夫婦食事と調じて、あむ右房門父子ふとふと一間のうちふ  
みちひじてすとぬせけを。あむ右房門父子ふとふとひそて出会ひし。  
ぬぐの物語ふるひど時どうし。やく睡ふつくりふ。やくと楓が  
声うそとおもふくとせりたさけどばあむ右房門驚ゆると醒て  
それば楓が腹ふ巻ひきを小蛇懷ふと飛出るとえり忽丈一丈

をうこの大蛇と變じ。楓がおとひくふらもあくすをひぬ。あおゆきしやまも  
ふふとびとこめりとまとひけりふ枕上ふかひくら複のうちもと。あきこの  
蟹もひ出て。大蛇ふとつと。蟹をみて肉をもみ。血の泉のごと  
なぞれて暫時ふ大蛇を殺しおんぬ蟹のちぢみふとひの複のうち  
をひつるとえしんとちぢみ。夢なりけふ。あむ右房門夢さられて。お  
うちふ汗とるじ。楓をゆきとうじけどば。楓もゆきふとひの起  
おけふぞ。衣服とくろうげて腹をくろふ。うねりて片時ももれ  
ぎる妖蛇。ごくへゆれやん失てあとだふす。あむ右房門さてへ正  
夢かとあひしとらひり。複のうちもとひの巻物とひよそひしてひく  
をそねば。画中の蟹の蟹ふ尽く鮮血ほれて。ぞあひけ。は時已ふ  
四更のころかしが。又平も楓がふれたり声を用つて起ひてあり。

藤波

成仏

得脱



楓孝道

あつまく小う夢中

名画乃奇特と得て

妖蛇乃難義と

まもる



あむを夢門が夢中の更に見る。灯火をかげての巻物を熟覧す。  
 掌をおてひひけへ寄かすりか妙ぢゆあう。巨勢の金岡ハ清和陽成  
 光孝。字多醍醐の五朝仕へ。官大納言小至。嘗て御府み藏  
 あり。金岡が画けり馬。毎夜萩の戸のやうとみ出で萩の花をくひと  
 古今著聞集みえたり。また仁和寺の御室み金岡が画馬あり。近  
 田のやうとみ出で。箱の苗をくひとく。また河内の国金田村牛頭  
 天王の社頭の金岡が筆の絵馬。なげ出しとひの説ひ。さて同  
 傳ふるといへども。目前から奇特をうる不思議さ。抑此百蟹の図  
 ば金岡殊ふ精神をこら。螃蟹の絵み妙ば得う。唐代の名画韓滉  
 との者。玄宗皇帝の勅よりて画たる。百蟹の図みぞひとひき  
 とく。圓けり。又今が匠めたり。神彩飛動誠み生うべ如し。奇特ある  
 もうべり。某うとみて画道の奥儀とぞひきたりといひ。け  
 欢びて巻物とぞり。再又ひひけへとふはれてろひひせり  
 物語あり。昔山城國相良郡久世郡元亨叙旨。綺田村か一個の美女有  
 て。曾て仏道と信ぞ。一時里人の舟の蟹と捉へ莫てぐれんと。女の  
 是をみて。あると。美食みつて蟹と尽く池ふそぞろ。又その父。一時  
 野ふ出て。蛇の墓と呑とえてあり。若墓ともよちやべ我娘を  
 汝ふゆくんといふ。蛇うわとぞ入たるまづて墓と吐て去。もの  
 夜衣冠の若人來り。約のどく女どもとひて一室ふつて。忽  
 大蛇と妻じて女の水とまづ。時小前の日たゞナられ。あるの  
 蟹こうふ集り。大蛇の遍身と蟄殺して女どもひ。大蟹へ去小解虫  
 へそふ死。もとてその所ふ蟹かび蛇のがさうぐり寺と建て

晋門山蟹満寺と号す。或まゝ紙幡寺とも云ひし。元亨叙書卷之八  
オアモトナリ。息女の事よりひ更ふ似て。ゾムシカレハ陰徳陽報の  
理と示す。このへ名画の奇特ふうして孝女とそくふ共ふ是仏の慈  
悲衆生濟度の方便とあれ壁ふおこす。我拙筆の絵をス。地  
水火風の四つの縁の。それてそらや紀此琵琶法師も忠孝全き竹杖  
手。憤惱の大と畜生道とまみかれて天堂不生る。かたち。子  
息文弥どり姿繪ともえまくし。緑青の髪とぞ胡粉の肌。平常  
の風ふ塗笠も骨の残る手弱女が。肩ふがけ一枝の紫雲たまびく  
藤の花。こと妹藤波が成仏の姿なり。積惡の角と折鬼など心  
をひきかへ。墨の衣ふ鉢かきぬへ是乃長谷部雲六が邪念を滅せ  
し姿。喜怒哀樂ふりうごき。まづくのめもとす。善と

ヤクニ悪とす。正とす。邪とす。恩とす。仇とす。も三世因果の報  
ニスバ互の恨もつとる。矢猛心とす。而て唯彼等が菩提とす。  
小志じ某さにやどめ夢ふ。安浪姿とす。而ち。敵三八郎の親子の如じ  
ミ忠孝と感ざれ。今ハ恨も尽を。安養淨土不生とひつひ  
て。オカルト光明をももりて。ちとスムね。成仏得脱と。ひは。已  
の折一も桂之助小枝於竜と共に。安養淨土不生とひつひ  
て。オカルト光明をももりて。ちとスムね。成仏得脱と。ひは。已  
の前手とつ。姿とつて。安浪の文弥等の菩提と  
ヒツヒツ。而て。刺髮とす。尼とす。玉とじとす。まじ右房門ひは。已  
の前手とつ。姿とつて。安浪の文弥等の菩提と  
ひは。汝刺髮无用。我今もと刺髮して。佐渡嶋坊と名告。我  
異名と汝子ゆづ。若殿を出ふ。あはせ。後ハ專修の念

仙者三度と。ゆの蟹満寺ちうぢろ破損くずれたりはしきべ。これと修理  
して亡人むすびの冥福の種たねとし。あんぢ六字南无右房門といふ名と  
ほけべ道心せーも同然どうぜんなり。汝又うねり文弥ぶみが師しとなつたり。  
えの、なんぞく沢角檢校さわくにけうきょくふきよひ近ちかい立たてふおこあらう。淨瑠璃じゆるい節せつと文子ぶんすひ因  
果の道理と唱哥うたうふほく。九河原くわら小於おとこをうれとゆゑ。普諸人ふしやくじんを  
勧進うげんして我志願の助力けいりょくせよ。おひおり。髻弗きふこゆきうて。葛浪くわな  
位牌いはい右手うしゅ向けとば。みあくそめ誠心まことを感うなでけ。六字南无右房門  
とく女太夫めおとひ淨瑠璃じゆるい芝居しばゐの始祖ししゆなり。こひづる。ハバ楓はばが事こと  
とそ。あむ右房門又桂之助けいのすけふむひの頭かぶをとげ。これより河内くわちの國くに  
かん越かんえつあると。若君わたくし小御ごみ對面たいめんあれし。奥方おくがたのあんぢくへやまくと  
なづぬ。つぎ夜よのあけぬ間まふらんくとむれせば。桂之助けいのすけをぐ  
竜りゆうもどもふ恙いたずらなくやうようとひりう門もんおくし。たゞか涙なみだをそそぎ  
て別れ總まことにふ一町いちまちをうりゆたけふ。昨日きのうやとい。縣あがた神子かみこ野のがせうの乞  
丐あこがれもをかづひありて道みちをきれ。あらう言い領りょう瀬名せならのう  
まびくらまびくらぬれ。佐さ木桂之助けいのすけとせん。ひづくらゆゑ。わ  
昨日きのう又平ひらが家いえふたり。家内の様子ようしよりこしこひりま。今差まつ  
えうりこうがふふ果ことあやれ者ものどおり。みづからうて賣銀めぎんふ  
あづかる。そく手てとつまゆまゆとぞとぞうとらう。おじ右房門うば追おぢ  
てそわんと。錫杖きじやうをとくのべる處ところふとひづくら物ものがづく。猿さる二郎

捧<sup>ハサウエイ</sup>と手<sup>ハシ</sup>を走<sup>ハシメテ</sup>り出<sup>ハシメル</sup>。奴原<sup>スルヤマ</sup>を散<sup>ハシメル</sup>ふ追<sup>ハシム</sup>ちじ。志賀<sup>シガ</sup>の山越<sup>シマツ</sup>  
え立<sup>ハシメル</sup>のたゆれにし人のちざう間道<sup>ハシメル</sup>と以<sup>ハシメル</sup>供<sup>ハシメル</sup>はまくんそ。ほひふ  
四人<sup>シヨウジン</sup>あつめひとひだゆき。そ雲六<sup>シシク</sup>ヶ尾<sup>ハシメル</sup>。又平<sup>ハシメル</sup>の夜<sup>ハシメル</sup>ち見<sup>ハシメル</sup>山<sup>ハシメル</sup>  
ゆきを烟<sup>ハシメル</sup>こす。かとねんもひふとひくへけりとぞ

十七 雪の渓の非熊

爰ふ又梅津の嘉門ハ母と共に舟を避て和州河州のまゝ金剛山水越  
峠の谷陰ふづき庵をひども。当山ハ赤草ふやく。殊ふ金山にて  
金剛砂と出るも。これらとさりて日の費ふせん。ぐく新をこそ  
水とす。ゆけと老母小孝行を尽し。ゆみかへ書籍を友として卧龍  
先生の跡を追。禪味を甘じて大幢国師の道を走り。名利の屈せぬ  
志をもつて。一日老母山寺ふまうをうちが比も異る冬の

時節。りわば。坂路。すのそみて。雪。歩。と。多く。満地玉。と。まづ。防ぐ  
ごとく。通ひ。りれらう道。も。らも。深く。雪。ふせ。と。なれ。おのづこ。道。ふ  
迷ひ。殊更。峠越。の吹雪。肌。ふき。て。寒。けれ。や。こ。あ。と。て。杖。と。あ。素  
一。た。と。居。折。も。猿師。ふ。追。出。さ。わ。と。化。熊。者。雪。を。踢。立。そ  
馳。あり。わ。ど。く。老母。小。飛。からん。と。一。処。よ。一人。の。若。者。木。陰。と。走。り  
出。立。た。と。が。く。と。と。熊。の。肩。え。を。一刀。き。り。つ。く。た。と。と。熊。に。怒。て。狂。ひ  
け。が。つ。し。不。足。と。と。か。よ。し。て。谷。底。と。さ。し。ま。あ。り。そ。わ。ら。り。り。の。若  
者。ハ。腰。を。か。う。と。老母。ふ。む。ひ。年。老。も。あ。ん。住。家。ま。を。負。行。ま。あ。せ。ん。こ。い。あ。ざ  
ふ。ま。び。が。じ。づ。く。も。あ。れ。あ。ん。住。家。ま。を。負。行。ま。あ。せ。ん。こ。い。あ。ざ  
老母。う。と。と。げ。ふ。づ。く。の。え。ん。か。み。あ。き。れ。ど。も。今。の。危。難。を。う。ひ。玉。う  
の。り。や。と。と。情。深。と。心。志。謝。と。ま。詞。ほ。そ。の。と。と。と。と。と。と。と。

ひきふゆゑり。をそくと。背をかゝれて老母を負。住家の方と向  
け走行け。こそ嘉門はひとと家ふゆて母の坂りのふを紀を案ド。朱  
更衣の大雪をなべ。途中をぞつづめんとかづき。も蓑笠を着てありと  
出母の坂路を左てひそむけ。ひづみの方うと老母。若男ふわりて來り。  
嘉門とそとおかけ。嘉門もすく公かられ。先達の為に近參ひと云ふ。老母  
若者の背もとどうたち。途中を荒熊ふ出会い。はじく一命を失ふき  
を。ひえ方の情を危急をまぬ。ちのるをも。これまで負ふに  
こがれ。嘉門若者ふしむ。母をひそむけ。あり。唐芳志。謝。一疋。じと  
相のづ。時ふ若者雪中ふまと伏て礼をまつ。卒示かず。死ん。水を  
梅津の嘉門。ごのあらあらざり。嘉門答て。某。深山。小住庵。猿  
と卧戸を共ふ。もろ。名を知り。人も。我姓名と

あす。あす。ばぶら。とのひけれ。若者益。ひく。をさげ。たゞ。泥中ふ  
尾を曳。あとも。先生の雷名と誰。あす。がう。あん。や。か。あ。山寺  
あそね。わ。は。老母へ先生の母人。あす。は。と。う。け。わ。り。あ。ひ。と。ア。骨を  
送り。來。一。も。先生。ふま。く。ん。古。を。こ。ひ。ゆ。ふ。や。ゆ。あ。り。某。へ。武。士。の  
浪人。り。が。何。と。軍。畧。智。謀。の。人。傑。ふ。き。が。ひ。兵。李。の。餘。緒。を  
ともう。が。ひ。知。り。再。家。と。お。ま。ん。り。の。こ。ひ。立。師。と。ち。の。じ。ひ。立。人。富。と  
同。ほ。う。ふ。け。山。の。谷。そ。陰。ふ。せ。と。避。て。住。梅。津。の。嘉。門。と。ふ。人。生。得。頓  
智。聰。明。と。と。軍。李。の。眼。を。う。し。石。黃。孫。吳。が。輿。儀。と。う。い。武。畧  
衆。ふ。秀。玉。か。し。その。才。名。か。く。と。わ。く。西。日。て。兼。好。法。師。の。章。紙。ふ。り。  
ひ。武。道。徒。然。草。と。ふ。兵。法。の。奥。儀。を。記。せ。一。脣。を。編。五。ト  
う。け。を。多。り。して。つ。づ。く。当。国。ふ。う。ほ。り。住。の。ふ。ほ。そ。相。ま。く。兵。李。の

梅津嘉門

河内國金剛

山小世と避て

生涯と  
清貧と



卷之五

十一

御指南ふあづから。やの奥儀の脣をも辨見一度らい。が容易示人ふ  
あふ支をもきしめんまろよ。また門路もがむとちひひす。今日しもるひひをど  
相まく。誠是師となりしづた時節到来。天のみぢびれあふ處がほ。  
向後おん家の奴僕ともおがまきて。薪水の業を余せられ。兵術の進退  
軍伍の勝敗。御指南たりづりづり。低頭謙讓してそひ入たけり。  
かどづくぬ嘉門感歎してぞく。ゆき若輩の事とみて。武道の  
心かけ深き殊勝きよ。いそぞう疎意ふ存づ。何ふもあと且某が  
宅ふやん越ゆれ。人への家ひもやまとえちざれども。某が得たる  
業ハ林ふこそ薪をそろて谷ふぐうて水とくもの。他の支へさくふ  
あふぞ殊更武道つれ。草とやん脣と編たるあふ。あともあ  
麗言ひ。軍師わくとくへおこがほしマとひひと笑つ。三人お連て

谷の下のあらすゑたりぬ。嘉門家小姓り老母ふ衣服をひきえ  
濡衣をすゞとかへし。もあ柴<sup>木</sup>などふひき。体とが  
若者ありそ。平日の孝行とひやり。嘉門茶と莫て若者ふよしめ  
とも。四  
四方山のうのびくに。まぐく時をうけろふ。断<sup>カ</sup>も外のうす声<sup>の</sup>  
の声ありぬ。人跡たえず。此かくと家ふ何者の来つやといづらふ。  
案内とうがみひぬまうづひえふ。これ一人の武士なり。義<sup>ミ</sup>  
打<sup>ウ</sup>着て笠の下ふ覆面したとが面へそぞうやうめとも。遠国<sup>ミ</sup>の旅人と  
紫じく打粉<sup>ウ</sup>。雪深くすうぎな染の戸を。やとととおなれ。  
誰をたゞせし。そゆそあきづ。声聞て老母立出。何人ぞと  
るひふ。おんまへ頃日兩度<sup>ト</sup>をあざとし侍<sup>マ</sup>。今日も嘉門家ふ  
をと。御用の間すわあひよとほ。をとくちたの。のとちと。嘉門ふ

やしきをせたりとも。は方かふおりふ旨も少く。とてもうけひやの  
ゆび足とつやもふる。そくに飯くらし。まわしてやへ出无益  
とのひき戸と撲地たる。暮ふる。嘉門ことと同何者り。れ  
べりゆけり。女人へあらひあらひとび。再又自然のひきよの観  
えふ。かの武士雪中ふ坐とし。情なだぞ。老母。嘉門どの家ふる  
どん處か。飯宅と持。よもじくそりをなす。とのひき。飯くけり  
ええ。折も雪へけくら。紛く揚ほして。恰も御繁の糞へ  
ごく。鶴毛の飛ふ。仰く。まくぬなふ寒き氣を。谷ニ陥り。ふ朔風  
を。吹き。さく。侍の義の毛ふ垂水まく。鉢のやうふやく  
こ。が。おはなば雪中ふる。れて。吹雪へ面ふげ。と。すがごく。く  
笠ふみ。真袖ふを。ひ。萬とひあら。寒き氣となまづ。爲休誠。

小鎌儀。ちく。今。年。す。も。凍死。づれ。形勢。嘉門。は。休。と。そ。と。氣。ふ。う。  
侍の。が。う。覺。寒。との。と。り。休。の。く。何。ぞ。ら。ひ。づ。ら。た。う。變。あ。ぐ。ん。と。古  
と。巻。て。そ。居。た。そ。れ。湯。小。伊。尹。と。得。周。小。太。公。望。と。り。ち。ひ。れ。し。も。大  
將。ち。る。人。賢。と。尊。び。敬。志。の。厚。す。き。あ。り。總。て。國。家。を。治。る。の。要。賢。臣  
か。あ。く。賢。臣。と。得。ふ。礼。讓。と。あ。く。じ。ざ。れ。ば。出。て。仕。へ。と。祿。と。施。し。金  
帛。と。以。て。招。く。る。賢。士。と。そ。ぶ。志。あ。た。人。由。へ。仕。る。莫。あ。う。こ。そ。ね。そ。の  
時。嘉。い。の。そ。ば。ち。く。と。し。が。雪。中。の。旅。人。は。何。者。小。ひ。や。ん。そ。る。も。氣  
の。毒。の。形。勢。あ。り。お。ん。心。ふ。や。う。へ。さ。る。者。あ。く。ば。理。と。の。づ。と。か。へ。飯。く。ま。れ  
き。某。生。て。か。ひ。か。一。や。さん。と。り。が。の。あ。く。そ。も。の。夕。ふ。な。く。ま。の。侍  
を。も。が。留。主。小。而。度。ま。で。来。り。て。さ。あ。ぐ。の。を。の。こ。更。我。心。不。か。あ。つ。ひ。

うけざぶるに様もやく飯つら。又今日も来りてうちふあひたまを望  
りれども仕官さう心ありれば多く人ふあへまぬふゑくをうごと  
の用そろひそ他行とゆづらひさんとろふ。あくまば飯宅を待んとそ  
ののとく寒氣ふ苦しむをりけ者は方の心も察せふと長居するうみ  
人ふくともちとめひとびにふあうどがの若者ふ隣にて追飯をふきま  
といひそ。若者とちうづけ。俄小詞をひそひけり。汝見れど奴僕も  
かのとひひる詞ふよそそ。やしつるまえゆゑ。の雪中の侍と汝が辨  
舌をひそおひがつせ。つよりとも嘉門へ他出せりこのひそ。是非とも  
ツモとひつれ。若者うけ玉ひし某侍東公の手柄もづれふ。おん  
幸ふある馬麻者を。おひがつそ不せやまんとのひそ。外のかま立とそ  
やまと旅人さんまつを待つも。おじ嘉門の飯宅のわど何の時と

ちうき雨。若日もれきが難儀のうへの難儀。かくうきよす。  
うきとひうき手とそそて。ひだらんとせし。新とそそ仰天。貴君  
由理之助勝基公へあうど。おも姿へ何を急ぞとお驚て恭礼せ  
行ひ。官領職のさん水と候て。一人の従者とも召具せしれど。かうじき  
御容体のふかーさと相のづ。勝基への人に。桂之助國知ふるうれ  
ども一言の答ひく。唯拳と握り歯とがまもと。寒氣ふたゞる様  
子す。桂之助うづき某さん館。義政公の御氣色を損ト。賓名入  
道殿の御内意ふたり。父の勘気をうけし。すなれば。かん詞とち多  
くぬも理あり。かう大雪とひ玉ひど。自は家ふくとまふと際  
るふ。嘉門を軍師ふ召抱玉ひん結構已存だる。某今田もい山  
中ふいこう。心と尽して嘉門ふ近づきぬ。別意ふあうど。曾てかん館

嘉門かねが編かみたる武道徒ぶぢゆ然草ぜんとひ眉まゆと御懇望ごんぼうありこのども。かと  
ふく松ひて他見たけみをあらそど。若翁命わきめいとひて召めしよしろ時ときに。かと眉まゆ  
を焼やきて。かとかくえこと必定ひじてありとて。うれまでそめさん沙汰さたもあ  
ざりき某偶みのりとらひし。かとこそ嘉門かじゆ不誠心ふせいじんとぞせ。かの  
眉まゆを得えてさん館さんふをとまつ。そとば微功びこうとち。ちえきと  
免めんの御内意ごないと願ねがひあらん爲なうわらうとかうとば。勝基尾目かつめいお  
放ほ佚ゆ無慙むぢんかと。さん館さんの御不奥ごふあとからう。父の勘氣かんきと  
ちう者もの。かうとばに詞ことかとのくまへか。桂けい之助のすけげふ理ごりとその家の  
料りょうと後悔ごくいしげうべ。嘉門かじゆ親子おやこ。勝基かつめいとおゆきのひそ味方みそめ  
つかせらうの功ごふああと。心のうちふらひらひおもわねて内うちふへがく  
老母おもの前まへおひきゆづく。老母おものまの。の馬ま麻ま者もの。ひよどりと。理

かとせりと。かとあらそ。汝なは案外あんわい不調法ふぢょうぽりのあらそひ。かひひあく。此  
家くわ不足あり。嘉門かじゆと師じこなの。兵法ひょうの道みちとらとそに。毎まいんこと。か  
くらうへだまき。かと奴僕ぬぎと召めしす。そのほしめふく戒けいめ。不至ふし  
公こうもろりのぞとひ。一つの服ふく紗包さと。そんふ打うち擲てきと。ども。桂けい  
之助のすけ露路つゆをうちも怒いらる。某もしが宿しゆ願成就がんじゆをもよそぐ。ひらう憂目うめ  
あふとも。世家しやくといづるふかくど。お氣きふかくへぬ。夏なつの子細こざいを。かと同ひと間まかくし。と。簞子たんしのうふ額ひだ  
かと引合ひあせ。かと。夏なつの子細こざいを。かと同ひと間まかくし。と。簞子たんしのうふ額ひだ  
の。涙なみだあらう。ふれ。形勢けいせい。誠まことにふ哀あらわの姿すがたを。かひ入いりて。そとく。たまう。  
かと。にも納戸のうとのひだで。と。かとひだで。立たつ出だる骨柄ほねがら。白糸しらいと緘いと。銀ぎんの  
鏢鍼さきの。腹卷はらまきの。か。萌黄もよ錦きんの陳羽ちんう織おり。青鉈せいばくの大口おほのくち。

黄、金作の左鞘の太刀を左。文曲武曲の二星と画たる軍扇と把て立出たる為体志氣堂々威風凜々にして誠ふ一個の英雄と見えたり。桂之助仰天。何人ぞと顧ふ是乃別人か。梅津嘉門景春あり。三、曉々敷打扮をとひまうけふ。嘉門門外不出。勝基といきまひひむて上坐ふ。と急桂之助の手とそろてその次ふあじしめ老母あり。弓もちるやふくさり平伏して恭礼とかひま。勝基ふむひてひひ。某がごとれ不肖の家と。ひきうち御懇望むる更冥加ふゆゑ仕合。頃日某が他行のあとよ兩度までん駕と枉らどひ。母の物語ふうけたみりとも。勝基公とひももとそんなど。某のさう虚名とあすと。これまで諸国の諸侯より召抱んと使者の来往。おげとひ。その大将の心。されも皆高禄えあくへど。おこどると、いふりにて。

軍師ともりゅう。礼義とまこと。只權威とめて招くわ。返答も學び。当代諸侯をほそども主君とぞじんひと。せよと。そくそくひて。准一人の從者とも具せざり。と。かち雪中の寒氣とあひ。露をとも。權威のつるやく。某一人とひん板とのひんと。うハツ。ひんかと。ひんかとひく。元勿体をともやと。ひく。ひん板にかまつ。ひく。磨下小属。ひく。ちのあじふ。兵具を帶て。ひん目をえ仕ふと。敬ふく相づけ。勝基なまび。我蜀の劉備ふまがふとひく。二度艸廬とひく。軍師をもくし。礼をねばひで。苦辛とひく。ひまもと早速の許容。あじふた。ひく。とのひく。老母はしごてひま。妻の始より。勝基公と察へ。おれも。いく度も心とならへる。

ありてとゞふ身すまひひぬ。元奥方へ質女みてかにあゑ少しも嘆のつる  
あり。奥方の御正腹と御披露ゆにしが平人の身みてやうべ君は妻をあ  
ま。孫もとども。腹へとちのちりよりのあられ。妻が爲みも正しく主君りまと  
りともあゆも奴僕とみび。打擲せしれ大罪あり候ども。されどもとく縁故  
ゆゑ。ひ包を御覧とぞ見じことに出こと桂之助へ始て実母の母ひも更  
を知りてお敬驚頓。小包とひきそとび。短冊余一ひの短冊ある。もとあげらんべ。  
咲向人柳津の川乃花もくらしうらむ後のうけもくすりと  
ひ。歌を志をと。桂之助眉とあらめて。手跡へ見えありこの老  
母小膝とぞくわ。そへ爲家卿の詠歌にて夫木集ふ入たる歌。わうが  
エみやく祖父君佐木盛貞公御在京の折り。妻が夫梅津兵衛  
北野の社人みてあはし時御連歌のつをふり筆とぞあてたる

一短冊あり。その短冊の箱を以て打擲侍へ。とちむち祖父君の  
かん奉どくされ。君うこれまで御不行跡を戒め。自然にあら  
み石さん怒のけり。もとえあらど妻が打擲となへあらが勤ふる体。  
深く先非を悔あひ。武道はれく草を得て。御勘氣をへびの  
種とほありん。御心底あらわれて。かんひととく胸さうらぢく悲心た  
とスセヤとほと涙とせ。老が心と。御推量をくられし。子うちも  
孫のやうに。よひ人の心とし。平人の心とあらば。祖母よ孫よ名告ゆ。  
娘がりとりうす。片時も傍とをもとほじふ君臣となる。しづぶ。  
ひなきことの少すだも。心ふらふのまじとのひて。悲歎ふ袖とひじ  
せ。良ゆうそ涙とねびひ。よほ嘉門ひうべの秘書を惜ましを。若ゆ  
うそまうれどりよかぞ。嘉門ひうべの書を取出て。桂之助ふ

おれり老母又勝基ふじひ御覧のぞく桂之助。もの今ひの志を  
あらためまちうれ。かん館の御前ある。づくそひくふ願。すら  
こりうれ桂之助。松眉と勝基ふ度。一。誓首傍伏。とこそもふうれと  
願け。勝基。お國。ひかねて。かん館御懇望の。秘書を。あら  
国知らず大功をねば。御前をよもよよもして。おでて。敗国。とこう  
持べ。この。おへ。三人ひしくおふこと恨り。初吉嘉門。勝基。おれ  
じうひ。先年。豊星。あらわれたる。刺星の。おも。蒼ふ。黄と。おびたうそそ。北難。長  
て。婦女。確を奪。大乱の起る。づき。き。ほ。こ。考。た。う。吏と語り。お。勝基。掌  
を。あて。その。先見。と感。ト。義政公の。北の。臺香樹院殿。ハ。若君。を。演  
名入道。ふ。相。托。ト。て。安。お。た。て。ん。に。今。出川殿。ハ。勝基。を。執。權。ヒ。テ。武將  
た。ん。こ。と。を。う。れ。天下。ニ。ツ。ふ。ワ。と。て。已。お。大。乱。の。起。ま。時。節。ある。

夏をりの。かくりけど、嘉門又先年瀬名が招きふ。応せば、そ山石坂  
橋之八事數人をおもて。おもておひゆふゆとをのこしたる夏をかくりを至ふ  
權兵、李の夏を論じ。嘉門に当山小住常ふ。早の城路を下し。楠氏の  
奥妙を感じる。夏をとと物語ける。嘉門笑ひて、いひけり。さうもる事  
官領職のかん水みて。山中ふ。唯ひとつ往来へ。あら。若瀬名方の者  
とも固知る。多勢とてこそかくるが。ほし玉へやん君子へ危きよ  
ちうづまととつて。軍慮のやどうけたまりと度し。詰問べ。勝基亮  
示と打笑する時の備て。ふあり。こひかく。懷を探り。蹄笛を口を出て  
吹き。忽鎧腹巻ふ。壁手。腰袖をもひく。もろて。蓑笠をうち  
着たり。荒武者ごも。この木陰が。この岩のげより。あひられ出で。數十人  
馳集り。枝とくまをたる馬を引出して。御飯館ごと。ぬ。嘉門も  
あがつて感嘆す。それゆふへ。韓信がりちふたる虚無の謀計。伏兵、乍  
もと其理をもやう。うりと称義の折しも。以前の手負熊しき。も  
てば。廻へ走り来る。を。荒武者ごも。かけぬきて。手槍をそろて已ふ。殺  
さんと決む。勝基えもひ。やれます。表へ。と。声かりて。そめあひ夫六韜  
を考る。文王太公望を得る時。トして非熊。己のと我。今已ふ。当世  
の呂尚を得て。いふぞ。熊を欲せんや。无益の殺生好む。バ。もとく  
放やれとか。せり。荒武者ごも。呼こそたつて放ちけ。勝基様之  
助ふ。和殿へ。今表へ。せとまのひ。飯国。の時節をまく。ゆく。老母  
へ。今も。ふともちひゆん。幸雪も。ふり。まく。この。まひて。馬ひまく  
て。乗あひ。吉祐門へ。馬の。左り。ふき。大勢の荒武者ごも。列をなす。

と前後とかこみ。けりのる雪は踏分て。林麻をかてひそめゆく。  
老母の嘉門がゆきぬて。門出とすおうて。そぞろみあがめどり。林  
之助のよどぎしげある姿をそよぶ胸あまう。悲しきおもむこ。  
志べーへ詞もあり。うらが。桂之助ふむひひき。君ふあひせす。あらまち  
りんが。あり。うきこゑくへそ。奥深くとも。うちのうちのひそむ。

れ何人ふあひゆうや。そと。のちくの巻を読得て。あらん

○ 雅州府志曰。梅津清景の塔。梅津邑ふある。清景は藤原惟隆  
十八世の孫也。代々院の北面を。禪法小坂。剃髪して日延と  
号を云。嘗つて一説是球。づれう是あるをあらむ。此考の巻之  
をま。第四回の下下記を。誤て。めしゆる。此下記せも。彼处に  
てしるべ

